

不死鳥パンチョ・ビヤ

パーシングのアメリカ軍チワワ侵入に呼応するかのようになり、カランサ軍のチワワ州への侵略が始まった。チワワの市民にとって、カランサのジェネラル・ハシント・トゥレピニョの部隊は、アメリカ軍と同じ余所者であった。1916年5月12日、恐らくトゥレピニョに唆され、カランサはチワワ州知事エンリケスを、ハシントの弟フランシスコ・トゥレピニョに挿げ替えた。カランサのチワワ政府はまるで進駐軍のように振舞ったため、多くの州民の反発を買った。この四月から五月、ビヤが傷を癒している頃、アメリカ人もカランサ派も一様にビヤの政治的、軍事的生命は終わったと信じていた。多くの者は彼が死んだとさえ思った。チワワは一万のアメリカ軍と、それに匹敵するほどのカランサ軍に占領されていた。このような状況下で、パンチョ・ビヤは奇跡のカムバックを成し遂げた。

45

ビヤの人気が高まっても、ハシント・トゥレピニョや、コアウイラ、ドゥランゴ両州の総指揮官フランシスコ・ムルヒアも、夏から秋にかけて、ビヤの軍事能力を無視し続けた。1916年の暮れには再びチワワ州のかなりの地域を支配下に置き、正規軍を持つに至ったビヤは、その年の独立記念日、9月15日の夜、九千のカランサ軍の大部分がいるチワワ市を二千の部隊で襲撃した。ビヤはチワワに留まるつもりは毛頭なく、刑務所を襲って囚人を開放し、市庁舎を一時的に占領するのが目的であった。

カランサの兵士が祝杯を挙げている中、「ビバ・ビヤ」を叫んで突入した奇襲は成功した。ビヤが近づいていると、二度も警告を受けていながら何の防衛策も講じていなかったトゥレピニョは、砲台のあるサンタ・ロサの山へ逃げた。しかし、同時に市庁舎を襲撃したビヤ分遣隊は、朝方まで続いた激しい撃ち合いにより四分の三の兵士を失った。囚人の中にはティエラ・ブランカでウエルタ軍を指揮してビヤと戦ったホセ・イネス・サラサールがいた。ビヤはサラサールを抱きしめて喜んだ。トゥレピニョは国防相長官オブregonへの報告で、見事にビヤの攻撃を退けた、と報告した。⁴⁶

一万のアメリカ軍が州の一部を占領し、九千のカランサ軍が州都に駐屯する中、ビヤが囚人を解放し、一時的にせよ州庁舎を占拠したのち、兵士の殆どを堂々と引き揚げたことで、チワワの人々の間でビヤの名声は急上昇し、前年の敗北は忘れ去られ、無敵神話が復活した。チワワからの撤退は敗退ではなく、新たな攻撃の始まりであった。サン・アンドゥレス、クシウラチク、サン・イシドロと次々と勝利を重ねた。給金もろくに貰っていなかったカランサ軍の兵士は脱走してビヤの戦列に加わった。

ビヤ軍がメキシコ市や南部に展開するのを防ごうと躍起になったオブregonは、セラヤ戦で戦功のあったフォルトゥナト・マイコッテと、長年ドゥランゴ州でビヤと戦ってきたアリエタ兄弟の二つの部隊をチワワ西部の山岳地帯へ送り込んだ。オブregonはこれ等歴戦の部隊は、ビヤに怯える事はなかりとうと期待をした。オブregonは「全力でぶつかればアランゴは尻尾を巻いて逃げる」といって激励した。オブregonの言葉を真に受けたマイ

コッテとアリエタは大敗を喫した。ピヤが待ち伏せしていたラ・エンラマダという場所へゆっくりと近づいていたマイコッテとアリエタは、「耳切り」と呼ばれたバウデリオ・ウリベの小さな分遣隊に突然襲われた。ほんの数分間撃ち合って、ウリベの部隊はピヤの前線に向かって逃げた。カランサ軍はピヤ軍が敗走したと信じ込んで無我夢中で追いかけて、ピヤ軍の懐の中に入り込んで一斉射撃を受け、マイコッテの部隊は潰走した。アリエッタは更にサンタ・ロサリアで列車に積んだ馬と弾薬を奪われる失態を犯した。カランサ軍チワワ総司令官トゥレピニョは、マイコッテが敗れてから、妻に四万七千ドルを持たせてフアレス市へ行かせ、自らはピヤを討とうとせずチワワに閉じこもった。 47

カランサ軍司令部にとりピヤは再び最も頭の痛い問題となった。カランサはパーシングの討伐軍をうまく自分たちの区域外に封じ込めることに成功していた。アメリカ軍を引き揚げるための交渉がアトランティック・シティで行われていた。ピヤが勢力を広げるとウイルソンが再びパーシング軍を送り込む恐れが出てきた。カランサが再びアメリカ軍の南下を許すと、ピヤは国土防衛に立ち上がる英雄となり、同じように国粹主義を標榜する部下によりカランサは転覆の憂き目に遭うであろう。間違ってもアメリカとの全面戦争になるような事態は、あらゆる犠牲を払ってでも阻止しなくてはならなかった。 48

オブレゴンはカランサの許可を得てトゥレピニョを降格させ、フランシスコ・ムルヒアをチワワの総司令官に任命した。そのムルヒアの縦隊がチワワに向かっていることを知ったピヤは、その部隊が到着する前に州都を攻める決心をした。1913年と異なり、奇襲攻撃をするわけにはいかなかったし、大砲もなかった。トゥレピニョはピヤの攻撃を予期し、サンタ・ロサの丘には重砲基地が築かれていた。ピヤ軍は鉄道線路を破壊してムルヒアの到着を遅らせる手を打ってから、北部師団最盛期のときのように、部隊は列車でチワワ市へ向かった。11月23日、州都の攻囲が開始された。 49

四日間、双方とも多くの犠牲者を出しながら、決着は付かなかった。初日、ピヤ騎兵隊の突撃は、サンタ・ロサからの機銃掃射で薙ぎ倒された。二日目、トゥレピニョ自ら兵を率いて反撃に出、一時はピヤ歩兵部隊を敗走させた。しかし、ピヤの懸命な巻き返しが成功し、トゥレピニョを押し返した。11月26日、四日目、決定的な勝利を確信したトゥレピニョは、その二日後に勝利の晩餐会を計画し、皆に通知を出していた。

丁度その頃、ピヤの陣営では、若干二十三才、体重五十キロそこそこの小柄なマルティン・ロペスが病院のベッドから起き出してピヤに面会を求めていた。腕を首から吊るし、胸板を嵌め、苦痛で顔を歪めながらピヤの前に立ったロペスは、三百人でサンタ・ロサを襲撃する許可を求めた。ピヤは最初これを斥けた。いくらなんでも体の三箇所にも傷を負った者を指揮官にするわけにはいかなかった。しかし、執拗に食い下がるロペスにピヤは折れた。その数時間後ロペスはサンタ・ロサを攻め取った。午前三時、ピヤ軍得意の早朝攻撃が始まった。激しい銃撃戦がサンタ・ロサの丘一帯で繰り広げられた。五時、突然砲撃が止み、それっきり砲声は途絶えた。朝七時、空が明るくなってから「ピバ・ピヤ」の歓

声が上がった。その瞬間ビヤは州都を手に入れたことを確信した。

数時間後、トゥレビニョはチワワ市を捨て、参謀や数人の騎兵を伴って馬で北東にある小さな町アルダマへ向かい、その夜はドロレスにあるアシエンダで明かした。あわてて逃げ、彼は部隊に撤退を伝えなかったため、残された兵士は何も知らずに戦闘を続け午後まで持ちこたえ、ビヤが最後通牒を付き付けるまで戦った。直ちに降伏すれば命は助ける、さもなければ皆殺しにする、とビヤは言った。カランサの守備隊長はこれに応じた。ビヤは捕虜を前に演説し、共にグリーンゴと戦おうと呼びかけ、将校も兵士もビヤ軍に編入された。将校は一般兵卒に落とされる代わりに命は助かった。しかし、三日もすると多くが再びカランサ軍に加わった。 50

突然の撤退をトゥレビニョは弁解して言った。弾薬が底を突き、戦闘を続けると徒に部下を犠牲にすることになった。彼の目的は、出来るだけ多くの兵士を撤退させ、ムルヒアの援軍を待ってチワワ奪回をすることにあつた。さらに、トゥレビニョはムルヒアの行進が遅かったことを責めた。1915年12月、トゥレビニョが七千の部隊を連れて十一日かけて行進した同じコースを、ムルヒアは二十五日もかけた。ムルヒアは前任者を厳しく糾弾し、トゥレビニョが給料を誤魔化して私腹を肥やしていたこと、必要とされる兵員より遥かに少ない兵士しか持たなかったこと、サンタ・ロサの防衛部隊が貧弱であったこと、弾薬は充分あつたこと、兵士に伝えることなく、自分が最初に撤退したのは卑怯であること、などを公表した。折からカランサ派内部では勢力争いが激しさを増していた。オブregonとパブロ・ゴンザレスは互いに凌ぎを削っていた。トゥレビニョはゴンザレスの腹心の部下であった。 51

45. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P583

46. Ibid. P584

47. Ibid. P589

48. Ibid. P598

49. Ibid. P601

50. Ibid. P602

51. Ibid. P603